【公益財団法人全国法人会総連合会長賞】
「税と共に生きていく」

富山市立芝園中学校三年　遠藤　珠羽

私は、今まで税についての知識があまりなかった。物を買った時に付いてくる消費税で損をした気分になり税金について良いイメージを持っていなかった。

しかし、その税金で私は何度も助けられていることを知った。

私は、生まれ付き病気を患っていて同い年の子達と比べて体が弱かった。日光に当たるのが駄目でよく学校を休んだり、学校に行っても毎日のように保健室に通っていた。中学校にあがってからは大分良くなり、激しい運動も出来るようになっていった。けれども完全に治ってはいないので学校を休む回数こそ減ったが、体調を崩すことが多々ある。そうすると決まって母に連れられて病院に行くのだが私はこの時間が大嫌いだった。母の運転する車に乗って病院に行くまでの時間、医師の話しを聞いている時間、診察が終わり薬を処方してもらうまでの待ち時間、どれをとっても良い思いをしなかった。なぜなら小さい頃は自分のことに精一杯で気にも留めていなかったが、小学生高学年頃から両親への申し訳なさで押し潰れそうだったからだ。精神面はもちろん、お金の面でも迷惑をかけてしまっているに違いないと思い込んでいた。ある日、その重圧に耐え切れなくなり、胸の内を母に晒け出しながら謝っていると、母は笑顔で子ども医療費受給制度を教えてくれた。それは中学三年生まで医療費の自己負担が無料になる制度なのだそうだ。私はこれを聞いてとてもびっくりした。そのような制度があることに驚いたし、何より自分が気付いていなかっただけで税というものはこんなにも身近に存在していたものだと痛快した。

このことがあってから私は日常生活において、視野を広げることを意識するようにしている。そのおかげで税について以前よりもくわしくなることが出来た。税はいわば未来へと命をつなぐバトンなのだ。このバトンがどんどん増えていけば今より、よりよい社会へと変わっていくだろう。しかし現実的に考えて現状だと難しいと考えられる。

私一人だけが行動を起こしてどうにかなるような簡単な問題ではない。

けれども一人一人が意識を変え、行動を起こせばそれは大きな力になる。

今、日本は税金を巡って「年金問題」や「少子高齢化」などたくさんの問題を抱えている。これは決して他人事ではなく、未来の自分達におおいに関係してくる。これからも日本に住むならば今こそ税について学び直す時なのではないだろうか。